

《特別寄稿》

ポーランドで暮らす択捉島土着のアイヌの末裔

三和 昭子

サシばあさん

大正 5 年生まれの父は択捉島の出身です。父の祖父は三浦という名で青森から択捉島にわたり、土着のアイヌだった祖母と結婚したと聞いていました。何故青森から遙か択捉まで渡ったのかは知りませんが、その祖母はサシという名前で、サシばあさんと呼ばれていたらしく、自分の死期を悟ってからは、衣装箱の一番下に用意していた死に装束を着て伏せ、一滴の水も食べ物も口にできなかったごっつい人だったらしくと何度も聞かされ、私もアイヌのサシばあさんみたいに誇り高く生き死にたいとずっと憧れてきたように思います。アイヌは誇り高く又その自然に対する畏敬や感謝の文化をいつも誇りに思い、自分にその血が流れていることが誇らしくてなりませんでした。

九州から北海道へ

私達家族は、父が八代海の干拓に関わっていて、九州の熊本県八代市に住んでいましたが、小学校四年生のときに転勤で福岡に引っ越しました。福岡女学院中等部に入学した時だったと思います。本籍や両親の身元調査のような書類を書く機会があって、その時に母は満州の大連生まれ、父は択捉島生まれと知りました。本籍は北海道択捉郡留別村(なぜか留萌郡留萌村と覚えていたのですが、調べてみたら択捉島には三つしか村がなく、留別村が正しいようです)と難しい漢字が並び、こんな読み方もあるんだなと漠然と思ったものです。

ミッションスクールでは毎朝礼拝があり、キリスト教に心を惹かれた私は中学二年生で洗礼を受けました。中学一年生の冬に父が転勤で日高に移り、私たち家族は学校のために福岡に残ったため、いつも遠いところにいる父を恋しがっておりました。しかし三年目の別居生活に疲れた母は札幌ならと北海道に引っ越すことに同意して、私は北星学園に編入しました。札幌でも、教会学校の助手や礼拝でオルガンを弾く練習や、讃美歌の合唱隊、祈祷会、聖書研究会と私は益々教会にのめりこみ、大好きなチョコレートも止めて貧しい人たちのためにと献金をし伝道活動に励んでいました。父も週末には帰宅して私達を温泉や湖や山に連れて行き、冬にはスキーやスケートを教えてくれました。

社交的なことが好きな母は、見知らぬ土地で恐らくは友達が少なくなつて寂しかったのでしょうか、

父の名前が丁稚みたいで本当に嫌だわとか、子供たちにアイヌの血が入っているのが嫌だとかよく母の嘆きを聞くようになりました。父は北海道に来れたのがとても幸せのようなのに、静内を特別好きなようなのに、何と心無いことを言うのか、そもそもアイヌの血のどこがいけないのか、私は徐々にそんな母を責めるようになりました。

母の父は満州で満鉄から大連の港長になり、政治家にもなって中学校を建てたり、戦後も神戸で妻と愛人を一緒の家に暮らせるような人でしたが、子供達の教育を重視して女の子は全員ミッションスクールに通わせ、ピアノを習わせ、男の子は美大と土木建築を修めさせるといった具合で、そのパンカラの叔父が、父の仕事ぶり男ぶりを見込んで、わが妹を是非にというご縁になったのです。

ところで父の家での趣味は尺八と習字で寡黙、蝶よ花よで育った母は全く違う環境で何度も逃げようと思ったようです。それでも後にはコーラス、謡曲、サラサだ料理だと社交を広げ、ヒスを起こしながらも家を守り四人の子を育てて来たのでした。母は典型的な和人でした。アイヌは土人、野蛮人、恥ずかしいから絶対人にそんなこと言わないでね。

でも私はその頃、よく父の幼少の頃からの辛い話を聞くようになりました。5 歳頃、網元の叔父にもらわれていった父は、両親が死んだと言われましたが、何里もある昼でも暗い森の道を逃げ帰る途中で何度も捕まり、ついに両親とは再会しなかったようです。父は小学校もまともに行かせてもらえなかったと言っていました。夏は舟で網の番をし、冬は炭焼きで山に入ったと言います。学校に行けたのは春と秋だけだったと。網元の叔父は酒飲みで、毎晩晩酌をしながら、父を目の前に座らせ、酒という字を百回も書かせられたとも。でもそのお蔭で字が上達して身を助けたから不思議なものだと。

今思うと

覚えているのは、父が長い真っ白な髭の写真を仏壇に飾って拝んでいたことです。あれが父親だったとすると、次男だった父は恐らく養子に出されたのでしょうか。母親の写真は見たことがありませんし、父の口から母親のことは聞いたこともありません。今思うと何故だろう? と思いますがもう聞く人もいません。

今ふと思ったことですが、アイヌのサシばあさんはもしかしたら、父の祖母ではなく母親だったので

はないだろうか？ と。もし父の祖父が択捉に渡ったとすれば、まだ明治になってはいないはずです。三浦という姓が百姓に許されていたとは思えない…武士だったとも聞いていない…母親が亡くなったので父は養子に出されたのかもしれませんが。それに祖父のあのやたらに長い髭の伸ばしかたはアイヌの風習そのもの。加えて私たちがウメ叔母さんと呼んでいた人の顔は口の周りに刺青が無いだけでアイヌの顔そのものでした。父の彫りの深い顔と奥まった灰色の眼とは少し違うけれど目は奥深く真っ黒で眉がひどく濃かった…私のマユも若い頃はゲジゲジといわれた位ですし、妹は毛深くて一緒に寝るとチクチクして痛い位。それにウメ叔母さんの指先は四角くて平たくて不思議なソリをしていました。父も私も。

父の思い

私たち姉妹は、四人ともあまり勉強の出来が良くなかったので、本当に贅沢にも全員が私立に通わせてもらい大変だったでしょう。父は本当に学校に行きたかった、だからお前たちにはどんなことしても好きなだけ学ばせてやりたいと何度も言っていました。私たちが学校に行かせてもらえたのは、そうした父の果しえなかった学びへの飢えと憧れと、そして母の「学校はミッションスクールじゃないとね」という思い込みが一致したからでした。

父は北海道のことを本土と呼んでいました。戦争ではじめて本土に渡ったと。鮭が川に盛り上がりて来るのを手で掴み取る話。岩陰の鱒を尾びれの方からそうっと撫でる様にして掴み上げて見せてくれた父。私は小さい時から樹木や花と話ができるのよ、とよく言っていました。今でもエコに拘り土に触れるとエネルギーをもらえるのはアイヌの血だと益々思えるこの頃です。たくさん父から聞いたかったことは、私もあちらに行ってから聞くことにしましょう。

(みわ・あきこ、ポーランド・ハルクローヴァ村)



木村和保氏講演会@ザコパネ・タトラ博物館 2018.10.22
(左から) 三和昭子、アンナ・ヴェンデ=スルミヤク館長、井上絢一のみなさん (POLE96 [2019.1] p.5 参照)

<http://24tp.pl/n/51946>

Moja historia 私のヒストリー

ポーランドに来たのは 1989 年。ある冬の散歩でゴルツェ山脈にあるこの場所に出会った。ハルクローヴァ村の上に横たわる美しい山の斜面。雪に覆われたタトラ山脈とその裾野、ドナイエツ川などの雄大な眺めは、高校時代を過ごした北海道を彷彿させた。日本ではすべてが満たされていたのに満足感がなかった。当時 45 歳で女性は定年、虚しさが残る。

この場所に魅惑された私はこの美しい斜面を買い、ここにペンションを建てることにした。道は長い間、木を切り出して引きずって来たため、一メートル半ほどの深さになった林道で、粘土質の泥の道はトラクターでも 4 輪駆動の車でも通れなくなり、道に石を入れるしかなかった。砂、砂利、石、セメント、レンガ、木などすべて上まで運ばなければならない。1991 年に始めた建築も 2 年半で何とか仕上がった(道の問題は長く残る)。美しい眺めとともに 12 部屋 24 人収容できる山小屋風木造のヴィラが、暖炉のサロンやビオ浄化槽を備えて完成した。

ヴィラを建てる間にずいぶん健康も崩し、精神的にも苦しかったが、代わりに二倍の生きる力と親友たちを得た。建築中に日本から子供たちが順次来て、大変な時期を一緒に生き延びた。後に友人たちとポーランド・日本交流、環境を蘇生するための「虹の会」を立ち上げ、様々な文化交流やエコロジーの教育を通して自分たちの周囲の環境を良くしようと試みた。桜まつり、凧揚げ大会やコンサートなども日本との文化交流の一環だった。

この住所は「有明」。村会議、郡会議、県会議を通して承認され、公式住所となった。有明は夜明けが近づいているけれど、まだ月が明るく空にかかっているその特別な時の状態をいうのですが、私が生まれ育ったのは九州の有明海に面した八代、最後に住んでいた場所も長野穂高の聖山有明山の麓、有明。有明には縁がある。

日本では人生がここより早く過ぎる気がした。人々はどこでも押し合いをしている気がする。何かに間に合わなければいけないし、遅れてはいけないから。今はポーランドのテンポの方が好き。遅れてもいいから。でも野の花が咲くのは見逃さないし、とうひの森のざわめきも鳥たちが歌っているのも聞き逃さない、雲の流れも。どこへ行こうと、私は私の村ハルクローヴァに喜んで帰ってくる。休暇や祝日などは子供たちが孫たちとやってくる(9 人の孫のうち、6 人はポーランド、3 人は日本)。「ついに私はここ、自分の家にいる、って感じ。

© Akiko Miwa 2019

<http://www.akiko.pl/o-mnie/?lang=ja>